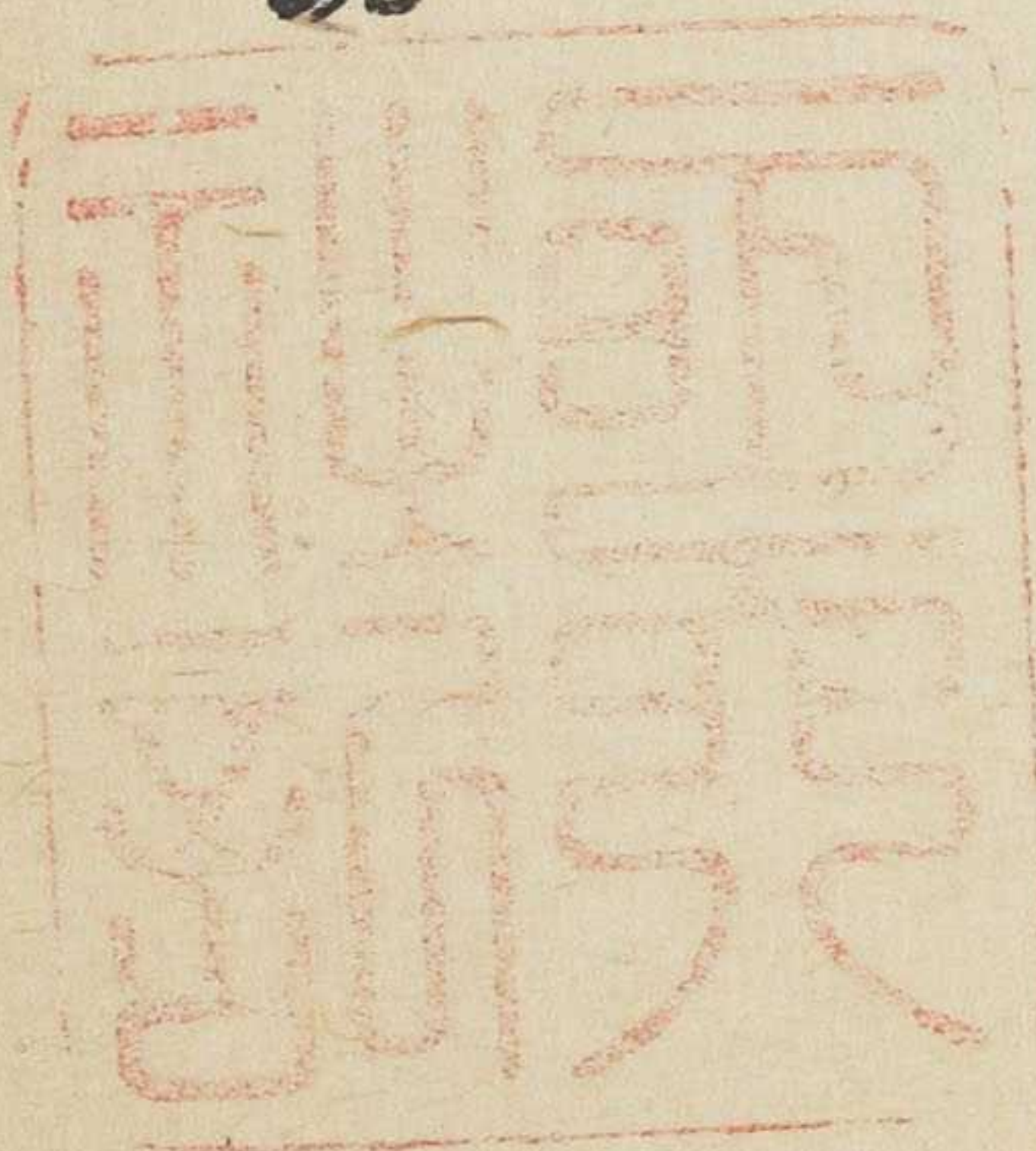


明
六
雜
誌

第
二
十
三
號

- 一內地旅行
- 一正金外出歎息錄
- 一西學一斑ノ續



頃日吾儕盍簪シ或ハ事理ヲ論シ或ハ
異聞ヲ談シ一ハ以テ學業ヲ研磨シ一
ハ以テ精神ヲ爽快ニス其談論筆記ス
ル所積テ冊ヲ成スニ及ヒ之ヲ鏤行シ
以テ同好ノ士ニ頒ツ鎖々タル小冊ナ
リト雖_凡邦人ノ爲ニ智識ヲ開クノ一
助ト爲ラハ幸甚

明治甲戌二月

明六同社識

明六社雜誌第二十三號明治七年十二月刊行

○内地旅行 十一月十六日演說

西 周

内地旅行此コンナ様外題ヲ茲へ投ケ出シテ儲其可否ハ如何ト云トウダツタ時ハ如何ト云トウ

揆揆ナシテ善カロウカ是レハ調度パアトウナスクス先生カ自國カラ南瓜ヲ持ツ

テ來テ此南瓜ハ旨ムマクツテ味カ善クツテ喰タベルト養生ノ爲ニナルカラ喰タベテ

御覽ナサイト謂メツラツタト同シ事テ成程珍メツラシイ事ハ珍ラシイ物ナレト喰クツ

テ見タ上デナケレハ旨イカ不佳マスイカ腹ノ爲ニ善イカ惡イカ分分ラナイモ

同様内地旅行モ許シテサシテ見タ上テナクテハ善カ惡イカ實ハ分分ラ

ナイ譯デゴザル

ダガソウ言フト其南瓜トウナスヲ喰ツテ中ツタ時ハ仕様カナイ中ツタ段ニナツテ喰ハ

ナカツタラ善カツタニト言ツテ後悔シタ所カ始ハシマラナイ譯ダ夫故ニ喰ハ又前サキ

ニ此南瓜ノ旨イカ不佳マスイカ腹ノ爲ニナルカ毒ニハナラヌカト云フコナ

子ハ成テス

ダガ南瓜ナラ切ッテ見テ木目ノ細サテ味ヲ知ルトカマダモ分ラテハ分
析術ニカケテ其成部分ヲ分離シテ見ルトカシテ旨イトカ不佳イトカ毒
ニナルトカ藥ニナルトカハ知レルトダガ内地旅行ト云フ外題ハソウ
ハ行^{イカ}又

ダカ其分析ノ仕方コソ違^カヘ何^トノ路分析シテ見テ利害ハ分ラヌトニ
相違ナイ

スレハ其分析ノ仕方ヲ求メテハナラヌト云フ處デ化學ノ分析法デハ
行カナイトカ分ツテ居ルカラロジツク即チ論理學ノ分析法ニカケテ
ハ成ラヌ

サテ此^{コンナ}様内地旅行トカ何トカ云フ類ノ外題ハ何^{イッ}レ何^ドノ道^{ロジツク}ノ
分析法ニカケテハ行カヌトハ能^ク分ツタ事トシテ然ラハロジツクノ分析

法ハ何^{トウ}如シタラ善カロウト云フ時ニ茲ニ二^タ通りノ分析法カアル

其一^ツハデダクシウン即チ演繹法ノ分析法ト其一^ツハインダクシウン即

ルクル即チ環キトナリテ此内地旅行ハ其一部分ノ曲線ダト云フコカ知
レル勿論此好和開交ト云フ全體ノ中ニハ此内地旅行ト云フ事實ハッカ
リテハナシ是ト同シク此好和開交ノ一部分タル事實カ猶數ケ條有ル
第一好和通商ノ條約此中ニ五港ヲ前後ニ開イタ事第二ニ東京大坂ノ
コンゼツシウン其後年ニ逐クニ居留地ヲ廣メタ事第三ニ今度ノインテリ
オルナイエーシ内地旅行第五ニハ雜居此數ケ條ノ事實ハ皆好和開交
ト云フ一環内即チ一軌道ノ内ノ一部分デ何ノ事實ヲ以テ攘夷絶交ト
云フ事實へ比較シテモ何ドレテモ皆ナ實反對ダカラソコデ内地旅行ト云
フ一事實ハ好和開交ト云フ全體ノ内ノ一分好和開交カ主意ナレハ内
地旅行モ許サテハナラヌト云フコハ明白デゴザル
今政事上ノ方向ハ何處ドニ在ルヤト視タラ好和開交ト云フ針路ヲ取ツタ
ト云フコハ誰ダレテモ識者ヲ待スシテ知レタコトデゴザルソレニ今内地旅行
ハ許サヌト云フテハ豪斯多里亞ニ針路ヲ向ケテ八丈島ノ先キカラベールン

ノ海峽へ向フ様ナ者テゴザラウ

借カウ言ツタ所デ誰デモ言フタラウ政事ノ方向カ好和開交タカラ内地
旅行ハ其中チノ一部分ト云フ位ナ事ハ學者臭ク演繹ダソ天文ダノト云
ハスモ知レタコデ併シ其處ニハ色々ナ關係カ有ツテソウ御正論通りニ
ハ行カヌコダ何イッレ何ドノ路許シハ許スコナレドマ猶早モイ最少シ内地ノ人
民カ開ケタ上デ許スノタト云フ議論カ出ルタロウ

併シ早イト言へハ此方コツチニモ理窟カアル東京大坂ノ居留地ハ舊幕ノ時
マタ針路ノ定ラナイ時ニ出來タコダソレカラ御一新後七年ト云フ星
霜チ經テ人間ノ身体カラダモ骨カラ變ツタト云フ月日ソレニ舊幕ノ時ヨリ一
分モ進マヌト言フテハ御一新テ針路カ定ツタト云フ甲斐ハナイ様ダ夫
デモマダ早イト云ハソ様カト云フ議論カ出ル

併シ今ノ前カラ話シタ議論チ能々見ルト實ニ學者論デ好和開交ト云
フ頭腦ノ題目カラ内地旅行ハ許サコハナラヌト立ツタ論故之チ學者論

ト言レテモ仕方カナイ所カゴザル

ソコテ學者論ニナラヌ様ニ一層利害ニ切ナ様ニ歸納ノ方法デ論シテ
見マセウダガ是ハ全ク歸納ノ法ト謂フデハナイ唯數ヶ條ノ事實ヲ數
ヘ立^テテ其上テ利害ヲ分^{ケル}處丈カ稍歸納ノ法トモ謂ハレル位イナ
テゴザル

ソレデ今歸納ノ法デ論シヤウト云フ段ニナツテ何様^{ドウ}シタラ善イ何様
スルノダト云フニ先^ツ内地旅行ト云フ題目ニ就テ内地旅行ヲ許セハ行
ヘハ何様^{トシ}利カアル何様害カアルト云フ^{コト}ヲ數ソヘ立チハ成ラヌ

併シ其利害ヲ數ヘ立ルニ其利害カ同種類ノ者デ無イ故一々比較シテ
見ル譯ニハ行カナイ是カ算術ダト利ヲ百日ト立テタラ其内デ害ノ色
々アルノチ二匁五分ニ三匁七分又五匁八分都合十二匁ノ害ヲ引去^ツテ
残り利カ八十八匁アルト云フ様ニ精密ナ比例カ立ツ^{コト}ナレドロシツク
デハソウハ行カヌ故ニ先^ツ内地旅行ヲ行^ツテ利ノアル方ヲ積極ポシチ^ウ

ト見害ノ方ヲ消極子ガチーウト見ルデゴザル

ソコデ積極ノポシチーウノ方ハ除イテ廢テ仕マイ殘ツタ消極ノ害バカリ取^テ此害バカリチ數ヘ立^テ其害カ幾ツアルカチ見テ此害ハ迎モ醫大可ヲサル害カ又策ヲ設ケテ害ヲ防ク^トカ出來ルカト云フ^トヲ穿鑿シテ其害カ悉ク防ク^トカ出來レハ今消極ダ害ダト云ツタ者ガ悉ク變シテ積極ノポシチーウニ歸ヘル筭用ダ又其害カ迎モ何^ド様ニシテモ防ク^トハ出來ヌ醫リスル^トハ出來ヌト見レハ愈々眞ノ害ヲ利害カ鈞合ナケレハ行ハヌカ善イト云フ者

ソコテ内地旅行ト云フ外題ニ害カ幾ツアルカト云フニ

第一 外國人カ這入込^ンダラ貿易ヲスルダロウ

第二 這入テ成ラナイ處ヘ這入ルダロウ

第三 保護シテ遣ルカ面倒ダ

第四 通辨カ分ラヌニ困ル

第五 狗ヲ連ルト困ル

第六 縛レガ出来タ時困ル

第七 マダ亂暴人カ居ロウモ知レヌ夫レ此間ノ箱館ノ日耳曼コンシ
ユルノ一件カ

ト害ト思フケ條ヲ數ヘ舉タ所カ第一ノ貿易ヲスルタロウハ是ハ内外
ニ諭告シテ禁シテ置テ其上デ仕タヲハ仕タ者カ曲事ダロウ第二ニ入
テ成ラナイ所ヘ這入ル天下ニ入テ成ラナイ所ハナイ譯但シ官府ダノ
役所ダノ或ハ今無イケレト要塞ダノ城堡ダノト云フハ何處ノ國モ同
様ダカラ内外人トモ同様トシテ犯セハ曲事ダ第三ノ保護ヲ假ス一件
既ニ當春ノ令テモ附添ヲ連ズモ善イトアレハ是モ内外人同様デ濟
ムトダ第四通辨是ハ連レヤウト連レマイト勝手次第通辨カナクテ不
自由ナハ彼地アツチノ事ダ第五狗ヲ連レル成程狗ハ道理ヲ知ラヌ者ダカラ
其啗合カラ喧嘩カ出来易イダカ是ハ禁シテモ構ハヌト第六ニ縛カ出

來ル是ハ向フノ約束面ニ略アル通り金ヲ領事ニ預ケルトカ願書ヲ出
シタ上トカ喧嘩カ起ツタラ公使ノ判斷ニ任ストカ其通りテ大概宜シカ
ロウシタガ茲ノ苦情カー一番大切デ何チ言フニモ日本ノ人民カ愚ダカ
ラ馬鹿ダカラ又シテハ舉足チ取ラレルダロウト云フノダシタガ子供
ニ將棋チ教ヘル様ナ者デ初手カラ對馬トハ何^ドシテモ行カヌダカラ步
三兵カラ仕込ム積リテ掛ツタラ却テ後々對馬ニナル基^マ眞^サ處^カ内地旅行位
テ年々百人モ五十人モ怪我チスル^コモアルマイソコデ第七一番終リ
ノマダ切ルト云フノダ是ハ外交小言ノ著者カ言ツタ通り政府カ元尊王
攘夷ト云フ面チ蒙^カツテ居タカラマダ其芝居ノ餘黨カ居ルデ困ルダロウ
ト云フ^コダ併シ箱館ノ例モアリ誰モ命チハ惜シサウナ者ダ是モ政府
ノ針路サヘ違^クハス好和開交ト云フ誠心カ徹底シタラハマダ二遍ヤ三
遍ハ有テモ構ハヌ^コ縣令カ氣チ利シテ早速ニ下手人チ取テ出シサヘ
スレハ構ハヌ^コ又政府デ好和開交ノ誠心サヘ徹底シタラ我カ國ニハ

山奥ニナルト命ヲ知ラヌノインギアソカ居リマスカラ御用心ナサレ
ト約束ヲキメテモ構ハンコスレハ第七ケ條モドウカカウカ防^キガ就ク
手段テ何分ニモ是ハト思フ所ハ悉クスチツブレ^レシウンテ細カニケ條
書ナシテ條約ヲ結^スンダナラ所謂消極ハ消シ盡シテ無イ者ニナルデゴ
ザラウスレハ跡ハ悉ク積極ニナルコカ明白タト云フ者ダカラ此歸納
ノ方カラ見テモ矢張許スカ善イト云フ道理ダ

併シ是デモマダ後ノ二ケ條ハ氣カ濟マナイ理窟ハ理窟ダガ學者ノ理
窟デ信用カ出来ナイト云フ論カアレハ又爰ニモギヒケ^レシウン即チ
變通ノ法ト云フ者カ幾ツモゴザル是ハ先^レニモ好和開交ト云フ軌道カア
ルト言ツタ通り其軌道ヲナス曲線ハ内地旅行ト云フ唯一ツノ曲線トハツカ
リ限リタコデハナイ此曲線ヲ又半分ニシテモ四分ニシテモ又ハ八分
カ十分デモ如何^{イカ}ニ小^サク割ツタ所ガ曲線ハ曲線ノ性質カ有テ如何^{トウ}シテモ
直線ニハナラナイ

スレハ内地旅行モ其通りテ好和開交ト云フ軌道内ノ者ト見タラ必ス
 一時ニセスモ宜カロウコトシ今年ハ東海道丈ノ旅行ヲ許シ來年ハ山陽ヲ許
 シ其次ハ東山道ヲ許シテ例ノ曲線ヲ二分ニモ三分ニモシタリ又何レ
 好和開交ノ軌道ノ内ニハ内地旅行ノ曲線バカリデハナイマダ先キニ雜
 居ト云フ曲線カアルト見ルトソレヲモ混淆シテ或ハ東京ノ築地ヲ廣
 メテ朱引内トスルモ其後年武藏相摸ニケ國トスルモ其次ニハ東海道
 丈ハ雜居ヲ許ストカ此變通ノ仕様ハ幾ラモ方法カアルダロウ
 スレハ強チニ斷ハラスモ爰チ潮ニ少シテモ許シタガ宜カロウスレハ
 豪斯太刺里亞へ行ク針路カ眞直ニ無人島へ指サスモ少シ琉球ノ方へ倚ツ
 タマテデベリリンクノ海峽へ向ケタトハ宜カロウ
 全體シユリスヂクシウンカ違フ裁判ノ權管カ彼方アツチへ届カヌダノタリ
 一フチ改正スル權カナイノ彼奴等アイツガ專擅ダノ狡猾ダノト言ツタ所ガ此
 地チカラ爲へキ事ホド爲テ置テソウシテ獨立ノ權ヲチ立テル様ニシナ

クテハ無理ニ抗衡スルコトハ出来マイト思ハレルデゴザル
シタカ此コンナ様議論ヲ述ベタラ柄政者ハ何様云フダロウ其様ニソナ貴様ノ様
ニ理窟ツポイ事ヲ言ツタ所ガ言フ口ハ有ツテモ爲ル權ハ有ルマイ姑マア黙ツテ居
ルヘシト言ハレタ所テ此論者モ閉口シテ席ヲ下ガルデゴザラウ

○正金外出歎息錄貨幣四錄ノ二

神田孝平

我邦開港以來金銀ノ外出頗ル多シ近年最モ甚タシ大抵其源六ナリ其
一輸出入差其二留學費其三外人雇費其四駐劄費其五國債費其六買物
費ナリ」案スルニ比年貿易輸入多クシテ輸出少シ輸入品代價ノ内ヨリ
輸出品代價ヲ引去レハ残りハ即チ外出ノ正金高ナリ明治六年貿易表
ニ據レハ此高八百〇三万六千百五拾三圓二二六トアリ頗ル喫驚スヘ
キ大數ナリ六年前後ノ數ハ未タ之ヲ知ルコトヲ得ス願フニ是ヨリ多キ
コトモアリ又少キコトモアルナルヘシ」留學費ハ申年政表ニ據レハ官私ヲ
合算シテ凡五拾万圓ニ及ヘリ前後年推シテ知ルヘシ」外人雇給ハ同表

ニ掲クル所官雇ノ分ノニ概算百万圓ハカリナリ前後年ハ知ル可カラ
スト雖次第ニ増ス方ナラント察ス之ニ加フルニ私雇ヲ以テセハ其増
更ニ大ナルヘシ駐扎費ハ外國在留公使領事ノ費ヲ云フナリ七年歲計
表ニ據レハ其高三拾六万三千二百三十五ト見ユ是ハ次第ニ増ス方ナ
ラシ外國債ノ年賦及ヒ利息ハ同上計表ニ三百五十七万〇二百〇三圓
ト見ヘタリ是ハ大抵毎年同様ナラシ以上五項ノ概算年々増減アルハ
勿論ナレトモ其極少ノ數ハ必然壹千万圓ノ下ニ在ラサルヘシト思ハ
ル買物代價ニ至テハ公布ノ記録ナクシテ全ク概算スルヲ得ス抑買
物ノ多端ナル砲銃ナリ船艦ナリ靴ナリ羅紗ナリ鋳道ナリ電線ナリ紡
機ナリ織機ナリ造幣器ナリ製鉄器ナリ礦山器ナリ製紙器ナリ學校用
具ナリ病院用品ナリ殆ト枚舉ニ遑アラス此外又臨時ノ用途アリ假令
ハ下ノ關償金殘百五拾万圓巡回大使費貳百万圓澳國博覽會費百万圓
(此二項ハ風聞ニ據ル)支那使節費等ノ如キ是ナリ尙ホ委シク穿鑿セハ

此類頗ル多カルヘシ臨時ノ事トハ云ヒナカラ年々殆ト臨時ノ有ラサ
ル年ナケレハ正金ハ年々常例ノ如クニ外出スルナリ此等ヲ統括シタ
ル數ヲ概算セント欲スレモ其術ヲ得サレハ姑ク人々ノ臆算ニ任セコ
、ニハ只驚クヘキ大數ニ至ルヘシト云フコト確信スルノミ正金來入
ノ道ハ甚ク少ナシ塵ニ海關礦山ノ二途アルノミ七年計表ニ據レハ海
關税金百七拾壹万六千九百拾五圓礦山收納廿九万六千七百五拾七圓
ト見ユ二項相合シテ塵ニ二百〇壹万三千六百七拾貳圓ノミ此外著大
ノ正金入額アルヲ知ラス情々惟ミルニ我邦從來正金ノ有高幾何アル
ヲ知ラスト雖其出ルコト多クシテ入ルコト少キモ亦已ニ久シケレハ元有
高ノ大半ハ現今既ニ耗減セシコト必セリ況ヤ方今正金外出ノ數一年ハ
一年ヨリ多シ如此ニシテ已マサレハ其全ク尽クルコト近キニ在ルヘシ
特ニ從來有高ノ確知スヘカラサルヲ以テ今年ニ尽ルカ明年ニ尽ルカ
將タ數年ノ後ニ在ル歟早晚ノ期イマダ知ル可ラサルノミ嗚呼前途ノ

「如此之ヲ浩歎ニ附セサル可ケンヤ

○西學一斑ノ續

中村正直

倍根英王顯理第七ノ法度ヲ贊シテ玉ノ立ル法度ハ深遠ニシテ粗鹵ナ

ラズ目前急遽ノ計ヲ爲ズシテ後來民生ノ福ヲ謀レリトイヘリコノ深

遠ト粗鹵ト二者ノ間ヲ識別セシメテ要ス所謂深遠トハ立法者タシカ

ニソノ目的ヲ達シ十全ノ功ヲ遂メテ期スレドモソノ時代マデ久シ

ク慣安スルヲ一旦ニコレヲ改メ民ノ耳目ヲ驚スヲ爲サズ特ニ自

然ノ時勢ニ隨ヒ天然ノ順便ニ就テ次第ニコレヲ行ヘハ多年ノ後自ラ

變化スルヲナリ堯典所謂於變時雍ハ是ナリカクノ如クナレバ風俗改

鹵ノ法ヲ立レハ民心騷動スルヲ一旦ニコレヲ行ントシテ粗

風俗ツイニ改變セズソノ目的達シガクシテ

史家休模曰ク倍根政事ノ大體ヲ論ズル遠識アリト雖モ貿易ノ事ヲ論

スルハ謬誤アルヲ免レズ由來貿易賣買ハ自然ニ任セ民人ヲシテ自由
ニ行ハシムベキノ事ナルニ倍根律法ヲ以テ是ヲ酌量セント欲シタリ

顯理第七ノ法度大抵公正ナリトイヘドモ貿易ノ商程ニ至テハ可ナラズ
コノ時馬ヲ外國ニ賣ルヲ禁シ又毛布冠帽等ノ價ヲ定メ及ヒ工人ノ
傭銀ヲ定メテ法律トセリコレ等ノ事ハ民生ノ自由ニ信セ賣買ノ天然
ニ任スベキナリ其他顯理ノ時田地ノ規制ヲ倍根大ニ稱賛セリ然レ
ドモ今ヨリ是ヲ視レハ農功ヲ勸ムルコトハナラズシテ却テ是ヲ妨害
セリ果シテ其後一百五十年ノ間農民ノ數減シタレバ屢々法ヲ設ケ是
ヲ防シガ更ニソノ甲斐ナカリキ蓋シ農夫稼穡ノ事ヲ務メテソノ作ル
トコロノ物早ク賣リサバケルトキハ人民競フテ力ヲ南畝ニ盡スベシ
何ゾ人民ノ數ノ減ズルコトヲ憂ヘンヤ故ニ自然ノ成^キ行^キニマカスルガ民
生ヲ濟フノ良劑ニシテ國家ヲ富スノ大道ナリ
休模ノ論スル如ク倍根邦國ノ經濟ヲ論ズルハ狹隘ニシテ且謬^レリト
言ベシ倍根ノ如キ理學ノ名家ニテ且ツ賢大臣ナルニ今ヨリ二百年ノ
昔ハカクノ如クノ謬見ヲ執^レリ是ヲ以テ今日英國ノ人民總体ニ智識

上進シ法度ノ事ヲ論ズル公正ニシテ明確ナルヲ近古ヨリハ遙ニ超過
スルヲ知ルベシ休模ノ説ノ如キ今ハ國人ノ公論トナリテ經濟ノ大道
理ト稱許セラレ、コナリ

稟 白

一 代價の每号不同に付豫め決定仕兼候得共前金にて發兌號有先二十冊分御引受の一割引五十冊分の一割半百冊分の一割引にて差上過不足の追て算當の上可申上候

一 府下おて御望の方の町所名前御投書次第發兌毎よ配達可仕遠國の府下おて御引受の御方より前金郵便税共受取不申内の遞送不仕候

明治七年三月

東京藥研堀町

賣捌所 報 知 社

大坂本町四丁目

取次所 河内屋眞七

京都府立第一

東京府立第一

東京府立第二

東京府立第三

東京府立第四

東京府立第五

東京府立第六

東京府立第七
東京府立第八
東京府立第九
東京府立第十
東京府立第十一
東京府立第十二
東京府立第十三
東京府立第十四
東京府立第十五
東京府立第十六
東京府立第十七
東京府立第十八
東京府立第十九
東京府立第二十

東京府立第二十一

